

「ウナギ文」の語用論的分析(2) 文脈における語彙統語構造の発展と拡張

高本 條 治*
(平成7年10月31日受理)

要 旨

ウナギ料理を注文する際に使われるとされる「ぼくはウナギだ。」という文(いわゆる「ウナギ文」)について、前稿(高本 1995b)を承けて論述する。本稿では、まず、前稿に引き続き、先行研究がどのようなパラフレーズを行っているかをまとめ、それを分類整理する。次に、「ウナギ文」発話の解釈のポイントが、デフォルト解釈がキャンセルされることによって引き起こされる推論にあるという主張を行い、「ウナギ文」発話の解釈記録形式との関連を論じる。最後に、「ウナギ文」の先行研究に「過剰な文法化」が見られることを指摘する。

KEY WORDS

interpretive record 解釈記録
structural expansion 構造拡張

overgrammaticalization 過剰な文法化
structural preservation 構造保持

2. ウナギ文に関する先行研究(承前¹⁾)

2-20 島田(1983)の考え方

島田(1983)は、ウナギ文が「質問に対する呼応文として存在している」(p. 39)とする²⁾。また、「ボクハウナギダ」という文の構造について、「ダ」の代わりに「ヨ」「デス」「。」なども使用されることから、「ボクハウナギ」と「ダ」とが「分離」でき、「僕の場合(食ベル、注文スルなど)はうなぎ」という「意味」を、「ダ」で「強調している」のだと説明する(p. 39)。すなわち、次のような見方である³⁾

(37) 「君ハ何ヲ食ベル?」という質問に対し、「ボク」という主語、「ウナギ」という目的語を係助詞の「ハ」で結合し、質問の回答として、見極めのつく範囲の意味内容を構築し、それを確認するために、「ダ」をあえて添加したものと判断できる。(p. 40)

島田の解釈は、「質問に対する呼応文」であるウナギ文に、当の質問内容を従属節の形で接合した、次のような自問自答表現によって、近似的に表すことができそうである。

(38) 何を食べるかという、ぼくはウナギだ。

*言語系教育講座

2-21 安藤 (1986) の考え方

安藤 (1986) は、奥津 (1978) の「述語代用説」も、北原 (1981) の「分裂文説」も、「現在の文法理論」では認められない変形上の問題点をもっていると指摘した上で、「僕ハ、ウナギダ。」という文は、次のような「主語なし文に由来する」と主張する。

(39) [[僕ハ] 主題 [φ ウナギダ]]

「φ」記号は「表現されていない主語」を表す。安藤は、次のように述べる。

(40) 表現されていない主語 φ は、場面に応じて、「僕が食べたい／注文する／釣る／etc. のは」というように、それぞれの場面から推論されるのみである。省略された主語が深層に言語的に存在しているとは考えない。(p. 149)

語用論的な推論とウナギ文の構造とを区別した上で、しかもその両者を関係づけようとしている点は注目しなくてはならない。この安藤の見方によれば、「それぞれの場面」に応じて「省略された主語」が推論によって得られた結果、(41)a のような解釈がまず得られることになるが、a はこのままでは日本語として不自然な表現であるため、日本語のコード規則に従った解釈記録形式⁴⁾としては、b のようにする必要がある。

(41) a. ぼくは [ぼくが食べたいのは] ウナギだ

b. ぼくは [食べたいのは] ウナギだ

2-22 薬 (1988) の考え方

薬 (1988) は、ウナギ文成立のためには「対比色のある文脈」が必要であるとし、その「基本条件」を次の2点にまとめている (p.48)。

(42) a. 「A は B だ」にとって「A₁ は B₁ だ」「A₂ は B₂ だ」のような対照をなす文脈が必要である。

b. 「A は B だ」が「A₁ は B₁ だ」などと対照をなすためには、両者に共通する事項がなければならない。

さらに、「共通する事項」を「X は」で表し、ウナギ文を次のように「モデル化」する。

(43) X は A は B で A₁ は B₁ だ。

ここから「X は」が省略されることでウナギ文が派生される⁵⁾というのである。例えば、「ぼくは太郎と夕食を食べる (注文する)。」という文脈があるときには、

(44) 食べる (注文する) のは、ぼくはウナギで、彼はラーメンだ。⁶⁾

のように表現することができる。このうち、下線部に相当する部分が残されて、「ぼくはウナギだ」というウナギ文が派生されると、薬は言うのである。

したがって、薬のいう「対比色のある文脈」が、潜在的な「文脈」として利用できる場合、ウナギ文は、次のように理解されることになる。

(45) 食べる (注文する) のは、ぼくはウナギだ。

2-23 佐藤 (1989) の考え方

佐藤 (1989) は、「A は B です。」は「自問自答の構造をなす」という見方に立つ。例えば、「長女はみんな男ですの。」という文の場合、「みんな男です」の部分が「最も必要なこと」であり、「長女は」の部分は、「長女のところはどうか、という質問に対する解答は」という内容を縮めたものであるとしている。

さらに、「私はラーメン。」というウナギ文に対して、

(46) 「私はラーメン。」も「私の食べたいのは何か」というと、それはラーメンです。」と言っている

と述べる。これに従えば、「ぼくはウナギだ」の場合には、「ぼくの食べたいのは何か」という「提題成分」が、「ぼくは」という形式に縮約することによって得られることになる。このとき、「ぼくはウナギだ」という発話に対する解釈は、ていねいに記録すれば(47a)のようになるが、近似的にはbのように表すこともできそうである。

(47) a. ぼくの食べたいのは何かという、それはウナギだ。

b. ぼくの食べたいのは、ウナギだ。

2-24 杉浦 (1991) の考え方

杉浦 (1991) は、

(48) 「だ/です」は「断定」という意味を担っているので、注文する際などの performative な「ぼくはうなぎ」という文が「ぼくはうなぎだ」という文から「だ」の消去によって生成されるとは考えられない。(p. 88)

という分析に基づき、ウナギ文が「だ」による述語代用から派生されるとする奥津 (1978) や、分裂文から派生されるとする北原 (1981) の考え方を斥け、「述語の消去のみを認め、更に、もとの文に断定の意味があれば任意に『だ』の付加を認めればいい」と主張する⁷⁾。

杉浦がウナギ文の生成過程を、次のように考えていることがわかる(ただし、杉浦は、'performative' なウナギ文⁸⁾には「だ」は付加されないとする)。

(49) a. ぼくはウナギを食べる

b. → ぼくはウナギ (述語の省略)

c. → ぼくはウナギだ (「だ」の付加)

したがって、杉浦の見方では、「ぼくはウナギだ」によって伝えられる内容は、いったん「だ」を外した上で、述語を復活させた、(49a)の言語形式に対応することになる。

2-25 全 (1992) の考え方

全 (1992) は、

(50) うなぎ文のようにコンテキストに寄りかかった表現が構文の変形規則によって生じるとは思わない。

とした上で、「前提の設定」が「うなぎ文成立のポイント」であると述べる (p. 42)。

この「前提」は、「コンテキストの中に潜在的に存在するもの」であり、また、「コンテキストに関連性、関与性のあるもの」でなくてはならない。それを全は、「潜在関与文脈」という用語で呼んでいる。

さらに全は、ウナギ文には、「潜在関与文脈の欠如要素を補う要素」である「焦点」が必須の要素であると主張する。逆に、「Aは」や「だ」は必須の要素ではないとしている。

全はこのような見方に基づいて、ウナギ文発話の場合には、「ぼくは/あなたは何かを食べる。」という(欠如要素を「焦点」としてもつ)「潜在関与文脈」が必要であり、この条件のもとに、「ぼくはウナギだ」、「ぼくはウナギ ϕ 」、「ぼく ϕ ウナギだ」、「ぼく ϕ ウナギ ϕ 」、「 $\phi\phi$ ウナギだ」、「 $\phi\phi$ ウナギ ϕ 」という6種類の「表現形式」が得られるとする。

全のような解釈は、「潜在関与文脈」の内容と「焦点」のありかと言語化して、ウナギ文に付加する操作を行うことで明示することができる。⑤1a に示すのは、そういう付加操作の一例である。また、これを近似的に言い換えた⑤1b においても、「前提」の内容と「焦点」のありかとは明示的に示すことができるはずである。

- ⑤1) a. 「[ぼくは何かを食べる]という前提でその「何か」を言う」と ぼくはウナギだ
 b. 「何をたべるかという」と ぼくはウナギだ

2-26 菊地 (1995) の考え方

菊地 (1995) は、ウナギ文について、「文脈があってこそ意味がとれる点」に注目し、また、必ずしも「ウナギ」という語彙項目が必須ではないことから、「〈文脈依存〉の『XはYだ』文とでも呼ぶべきだろう」(p.60) と述べる。

さらに、ウナギ文の成立について、次のような見方を注記している。これは、ウナギ文の「基の形」を「私が注文するのはウナギだ」とする見方である。

- ⑤2) 「私は鰻だ」の基の形としては「私は鰻を注文する」と見る説、「私が注文するのは鰻だ」と見る説などがあるが、私見では、たとえば知事について話す場合の「東京は青島さんだ」の基の形は動詞述語文には還元しにくい(最も単純には「東京の知事は青島さんだ」と見るべきだろう)といった点を考えると、上文についても「私が注文するのは鰻だ」を基と考え、いずれの場合も、Xを含む句を主語とする名詞述語文「[X……]はYだ」の……の部分削除されて「XはYだ」が得られる、と見るのがよいと思われる。(p.67)

3. 先行研究に見られるパラフレーズのパターン

前節では、冗長さをあえて省みず、ウナギ文に関する先行研究において、ウナギ文がどのようにパラフレーズされてきたか(あるいは、論旨から見てどのようにパラフレーズされるか)を見てきた。私自身の理解に従って言い換えを施したものも含めて、先行研究に見られたパラフレーズを、次ページ⑤3の表にまとめた。

右欄にあげた出典のうち、右肩に*を付したものは語彙項目の一部を置き換えたことを示し、**を付したものは論旨に従って作例ないしは加工したことを示している。

例文の下線部は、ウナギ文の元の語彙統語構造に対して、敷衍拡張された要素(拡張要素)であることを示す。A~Dの4つのタイプは、この拡張要素がどのような構造的位置に付加されているかを基準にして分類したものである。タイプ名の後の代数式は、その構造の組成特徴を模倣的に示したもので、[X]が拡張要素を表している。

Aタイプのパラフレーズは、基本的には、「ボクが、ウナギヲ [X] スル」というパターンである。元の「ぼくはウナギだ」という文が名詞述語文の形式であるのに対して、Aタイプのパラフレーズは動詞述語文に置き換えられている。これがAタイプの特徴である。なお、9の「ぼくはウナギにする」、10の「ぼくはウナギに決めた」も、パラフレーズ結果が動詞述語文となっていること、また、それぞれ「ボクが、ウナギヲ 選択スル」という内容を表している点で上記の枠組みに近似的に収まることを考え、Aタイプに含めた。

(53) ウナギ文に対するパラフレーズ

A タイプ: (ぼく + (ウナギ + X))

- | | | |
|----|---------------------------|--|
| 1 | ぼくはウナギを <u>食べる</u> | 金田一(1955)*, 奥津(1978), 仁田(1980), 尾上(1981b), 藤田(1983)**, 杉浦(1991)*, Muraki (1974)* |
| 2 | ぼくはウナギを <u>食べることにするのだ</u> | 川合(1978)* |
| 3 | ぼくはウナギを <u>食べたい</u> | 国立国語研究所(1963), 奥津(1983)* |
| 4 | ぼくがウナギが <u>食べたい</u> | 北原(1980) |
| 5 | ぼくはウナギが <u>食べたいのだ</u> | 三上(1955) |
| 6 | ぼくはウナギを <u>注文する</u> | 三上(1960)*, 国立国語研究所(1963), 久野(1978), 仁田(1980) |
| 7 | ぼくはウナギを <u>注文したのだ</u> | Martin(1975)* |
| 8 | ぼくはウナギを <u>注文したいのだ</u> | 川合(1978)* |
| 9 | ぼくはウナギに <u>する</u> | 大久保(1973), 川合(1978)*, 尾上(1982) |
| 10 | ぼくはウナギに <u>決めた</u> | 国立国語研究所(1963) |

B タイプ: ((ぼく + X) + ウナギ)

- | | | |
|----|-------------------------|--------------------------------|
| 11 | ぼくが <u>食べるのはウナギだ</u> | 仁田(1980) |
| 12 | ぼくが <u>食べたいのはウナギだ</u> | 北原(1980) |
| 13 | ぼくが <u>食べたいのがウナギだ</u> | 北原(1984) |
| 14 | ぼくの <u>食べたいのはウナギだ</u> | 三上(1955), 佐藤(1989)** |
| 15 | ぼくが <u>注文するのはウナギだ</u> | 森岡(1980), 尾上(1981b), 菊地(1995)* |
| 16 | ぼくの <u>注文するものはウナギだ</u> | 仁田(1980) |
| 17 | ぼくが <u>注文したいものはウナギだ</u> | 川合(1978)* |
| 18 | ぼくの <u>注文はウナギだ</u> | 三上(1960)*, 大久保(1973) |
| 19 | ぼくの <u>注文がウナギだ</u> | 山口(1965), 川本(1976)** |

C タイプ: (ぼく + (X + ウナギ))

- | | | |
|----|------------------------------|----------------------|
| 20 | ぼくについて言えば, <u>食べたいのはウナギだ</u> | 川合(1978)* |
| 21 | ぼくは <u>食べたいのはウナギだ</u> | 堀川(1983), 安藤(1986)** |

D タイプ: (X + (ぼく + ウナギ))

- | | | |
|----|-----------------------------|-----------------------|
| 22 | <u>注文はぼくがウナギだ</u> | 山口(1965) |
| 23 | <u>食べるのは, ぼくはウナギだ</u> | 薬(1988)** |
| 24 | <u>何を食べるか</u> というと, ぼくはウナギだ | 島田(1983)**, 全(1992)** |

Bタイプのパラフレーズは、基本的には、「ボクガ \boxed{X} スルノガ、ウナギダ」というパターンである。この場合は、Aタイプと異なり、「 α は β だ」という名詞述語文としての形式は、そのまま保持されている。パラフレーズを生み出す背景に、元の「 α は β だ」という文構造を保持しようという意図が働いていたのではないかと推察される。なお、18・19は、「 \boxed{X} スル」を名詞化することで、「ボクノ \boxed{X} ガ、ウナギダ」という形式になっているが、内容面で上記の枠組みに近似していることから、Bタイプに含めた。

Cタイプのパラフレーズは、基本的には、「ボクハ、 \boxed{X} ハ、ウナギダ」というパターンである。また、Dタイプのパラフレーズは、基本的には、「 \boxed{X} ハ、ボクハ、ウナギダ」というパターンである。Bタイプと同様、いずれも、名詞述語文という文構造が保持されている点で、Aタイプとは区別される。

このように、4つのパラフレーズのパターンのうちで、Aタイプと、ほかの3タイプ(B・C・D)とは、構造保持という点で対立を見せている。名詞述語文という文構造がそのまま残されている点で、B・C・Dの各タイプには、厳格な構造保持が認められる。それに対して、Aタイプでは、構造保持についてはそれほど厳格ではなく、むしろ、命題内容をよりわかりやすく表示することに重点が置かれているようである。

次に拡張要素 \boxed{X} の中身について検討してみよう。9 (「 \sim にする」)、10 (「 \sim に決める」)、ならびに、名詞「注文」を使用している18・19・22以外では、「食べる」または「注文する」という動詞を中心として拡張要素が構成されている。「食べる」「注文する」という動詞を拡張要素として付加することの意味は何であろうか。

「食べる」「注文する」という動詞は、その下位範疇化の機能によって、項となる「ぼく」と「ウナギ」に一定の意味役割を付与する。例えば、パラフレーズ1の「ぼくはウナギを食べる」の場合、「ぼく」は「(ウナギを) 食べる主体」であり、「ウナギ」は「(ぼくによって) 食べられる対象」である。パラフレーズ6の「ぼくはウナギを注文する」の場合も同様で、「ぼく」は「(ウナギを) 注文する主体」、「ウナギ」は「(ぼくによって) 注文される対象」である。

しかし、ここで問題なのは、「食べる」や「注文する」という特定の動詞がなぜ選択されたのか、という点である。もちろん、動詞なら何でもよいわけではない。この点に関して、例えば、小泉(1990)は、次のように述べている。

64) 「ウナギ」は、料理の品目であるから、状況によって、「食べる」「注文する」とか、魚屋の店頭であれば、「買う」とかのように、推意を働かせて理解するしかない。(pp. 170-1) しかし、さらに疑問は続く。小泉は、名詞「ウナギ」が、〈ウナギ属ウナギ科の魚類動物〉の名称ではなく、「料理の品目」を示す名称であるとして、同定済みであることを前提にしている。しかし、そのような同定をするために必要な情報は、「ぼくはウナギだ」という文の中には明示されていない。同定が可能になるためには何かが必要だったはずである。いったい何が必要だったのだろうか。

この点について、私は次のように考える。「ぼくはウナギだ」というウナギ文には、「ぼく」と「ウナギ」との間の意味役割関係を積極的に明示する言語表現がない。そのため、この表現自体には、「ウナギ」という名詞の語義のあやふやさや、指示関係のあやふやさを解決する糸口もない。そこで、「ぼく」と「ウナギ」の意味役割関係を査定し、名詞「ウナギ」が有する曖昧性を除去する場合には、文脈情報を用いた推論が不可欠である。「ウナギ」が「料理の品目」であるというのも、その推論の成果である。これを言語を用いて、仮に次のように明示したとし

よう。

(55) a. ぼくは、料理品目としてのウナギだ。

b. ぼくは、ウナギという料理品目だ。

しかし、これではまだ、何かが不足している。必要な推論成果が、まだ十分に盛り込まれていないように感じられる。次に、これを(56)のように敷衍してみる。今度は、ウナギ文に対する推論成果が、きわめて明示的な形ではっきり示されることがわかる。

(56) a. ぼくは、料理品目としてのウナギを食べる。

b. ぼくが注文するのは、ウナギという料理品目だ。

このことから、「食べる」「注文する」という動詞の存在は、ウナギ文に対する解釈を明示的に記録する上で、きわめて大きな意味をもっていることが理解できる。しかし、このような文脈依存的な解釈がもたらされる背景には、いったいどのような事情があるのだろうか。

4. ウナギ文に対するパラドックス解釈とそのキャンセル

ウナギ文が、日本語研究者をはじめ、多くの人の関心を集めてきた理由の一つは、「ぼくはウナギだ」を字義通りに理解するとき、次のようなパラドックスが生じてしまう点にあったと思われる。「ウナギ文」という愛称も、このパラドックスを意識した命名であろう。

(57) a. 「ぼく」は、この発話の話し手を指示する。日本語の話し手である以上、「ぼく」の指示対象は、人間クラスに属する。

b. 一方、「ウナギ」は、人間以外のクラスか、人間以外のクラスに属する個物を表す。

c. 「AはBだ」という繫辞文は、デフォルトで、「AがBと同一指示関係にあること」、もしくは、「AがBというクラスの成員であること」を表す。

d. しかし、人間クラスに属する「ぼく」と、人間以外のクラスに属する「ウナギ」とが同一指示関係にないことは明らかであるし、また、人間クラスに属する「ぼく」が、人間以外のクラスである「ウナギ」の成員でないことも明らかである。したがって、この文のデフォルト解釈はパラドックスとなる。

「ぼくはウナギだ」を字義通りに解釈した場合に生じる、このようなパラドックスは、「ウナギ文」自体への興味や関心を引き起こす契機になったとともに、「日本語は非論理的だ」といういささか偏頗な議論の話題としても利用された向きがある。そういう議論の対極に、「日本語には、日本語としての〈論理〉があるのだ」という、これもまた偏った主張が生み出される副作用も生んだ。字義通りの解釈が、実際の発話場面で有効な解釈との間にズレを生じるということは、具体的な言語運用の中にはざらにあることだが、ウナギ文は、パラドックスとして格段に面白かったことと、「日本語の〈論理〉」論争の恰好の話材になったことから、広い注目を集めることになったのだろう。

ところで、上記(57)のようなパラドックスが生じる原因は、どこにあるのだろうか。私は、古典的形式論理における繫辞文「AはBだ」と、日常言語における「AはBだ」という発話を(意図的に)混同しているところに、その原因があると見る。

日常言語における「AはBだ」という発話では、AとBの関係は、文脈によってきわめて多様であり、多くの場合、その関係のありようを特定するためには、文脈の支えや文脈に応じた

推論を要する（もちろん、これは「AはBだ」に限ったことではない¹⁰⁾）。次の例の「私は山口です。」は、表現形式としては同じでも、「私」と「山口」との関係は、先行する問の内容に応じて変化する。

- (58) a. 「お名前は？」「私は山口です。」
 b. 「ご出身は？」「私は山口です。」
 c. 「乗車駅は？」「私は山口です。」

これに対して、古典的形式論理¹¹⁾では、繫辞文「AはBだ」について、主辞「A」と賓辞「B」との個別的文脈依存的な関係は問題にされない。そこでは、主辞と賓辞とは、名辞として的一般性が仮定され、両者が結合したときの定言判断「AはBだ」全体の真偽値だけが問題とされる。つまり、「AはBだ」という肯定判断形式は、名辞Aが示す外延と名辞Bが示す外延との間の、一致、包摂、部分包摂などの、いわゆる周延関係を示すだけであり、主辞と賓辞の具体的な関係のありようは問題とされない。この点で、日常言語における「AはBだ」の理解とは、大きく異なっている。

したがって、古典的形式論理の見方をあえて適用すれば、「AはBだ」という肯定判断形式をとっている「ぼくはウナギだ」についても、「ぼく」と「ウナギ」が一致するとか、「ぼく」が「ウナギ」（というクラス）に包摂されるとか、そういう周延関係だけが問題にされることになる。しかしながら、「ぼく」という代名詞を、何かの一般的な性質を示す名辞だと見なすことはできそうにない。なぜなら、「ぼく」は、発話場面、すなわち、話し手と聞き手との相互関係の中に置かれてはじめて、具体値が決定されるからである。文脈から切り離されたままでは、単に未知の変項 x であるにすぎない。日常言語においては、この「ぼく」が、具体的な発話状況とこの発話とを媒介する重要な役割をもつことになるわけだが、このあたりの事情を無視して、「ぼく」を「人間というクラスの外延」として単純に名辞扱いしてしまうと、67のようなパラドックスが生じる。

ただし、ここで注意が必要なのは、日常言語においても、「AはBだ」という文形式が、「AはBと同一指示関係にある」とか、「AはBというクラスの成員である」という解釈をデフォルト値としては受けやすいことである。しかし、日常言語におけるこのデフォルト解釈は、文脈によってはキャンセルされる可能性を常にもっているという点が重要である。その点で、ウナギ文に対する文脈依存的な解釈は、このデフォルト解釈をキャンセルするところから始まるということになる。

5. ウナギ文発話の解釈と述語による解釈記録

「ぼく」の指示対象を「ぼく_i」と表すことにする。また、「ウナギ」を指示表現と見るとき、その指示対象を「ウナギ_i」と表し、「ウナギ」をクラス名と見るとき、それが示すクラスを「〈ウナギ〉」と表すことにする。

「ウナギ_i」と「〈ウナギ〉」を区別するのは、次の理由による。例えば、話し手の目の前に置かれたメニューに「うなぎ丼」の写真が載っているとす。その「うなぎ丼」を指示するために「ウナギ」という名詞を使用するときには、その指示対象が問題となる。また、一般的な料理品目の一つとして想起された「うなぎ丼」を「ウナギ」という名詞を用いて言及する際には、

クラス概念（すなわち、料理品目のサブクラスとしての「うなぎ丼」）が問題となる。「ぼくはウナギだ」という発話で「うなぎ丼」を注文する際には、この両方の場合が考えられそうである。これは、次の例の a と b の違いに対応する。

(59) a. ぼくは、メニューにある、このうなぎ丼が食べたい。

b. ぼくは、いわゆるうなぎ丼というものが食べたい。

さて、前述の通り、ウナギ文のデフォルト解釈の枠組みは、次のように表すことができる。

(60) a. 「ぼく_i」は「うなぎ_j」と同一指示関係にある。

b. 「ぼく_i」は「<うなぎ>」というクラスの成員である。

これらは、それぞれ、「ぼくはウナギだ。」の字義通りの意味の一つであり、この発話形式をコード解読することで直接得ることができる想定、すなわち、論理形式の一つである。一般に、一つの発話形式が、ただ一つの論理形式に対応するとは言えない。したがって、可能な論理形式群から、どの論理形式を選択するかということも、発話理解の過程では重要な課題となる。さらに、選択された論理形式に対して、指示関係を特定したり、曖昧性を除去したり、意味的な敷衍拡張を行ったりする作業が、文脈に応じた推論として行われることによって、論理形式は発展していき、より具体的で個別的な想定に限りなく接近していく。

しかし、デフォルトで選択された論理形式を発展させて、具体的・個別的な想定を作り上げてみたとしても、何ら有効な文脈効果が得られないことが明白である場合には、その想定作りの作業は即座にキャンセルされ、基になった論理形式そのものもキャンセルされる。ウナギ文の場合、「ぼく_i」と「ウナギ_j」との間に同一指示関係があると想定したり、「ぼく_i」を「<ウナギ>」というクラスの成員だと想定したりすることが、その他の文脈想定と矛盾し、しかも、その矛盾が従来の文脈想定を廃棄して文脈を書き換えるだけの効力をもたない場合、(60)のような論理形式は、即座にキャンセルされることになる。そうすると、当然、論理形式の立て直しが必要になってくる。

ところで、「ぼくはウナギだ。」というウナギ文から得られる論理形式を、最も抽象的に表現すると、次のようになるだろう。

(61) 「ぼく_i」について、「ウナギ_j」または「<ウナギ>」との間に関係 R がある。

先に挙げた(60)aは「関係 R 」を「同一関係」と捉えていたのであり、bは「関係 R 」を「包摂関係」と捉えていたことになる。

この「関係 R 」を、池上 (1981) は、「ぼく」と「ウナギ」との「近接性」であるとしている。

(62) 「ボクハウナギダ/デアル」という表現の基本的な意味は、「ボク」と「ウナギ」という対象の間にある種の近接の関係（つまり、何らかの密接な関係）があるということである。(p. 37)

しかし、池上の考え方は、「ウナギだ」を「ウナギである」と言い換えたときに出現する「で」の「基本的な意味」が「近接性」であり、それがウナギ文理解を支えている、というものである。私はこの点は賛成できない。「ぼく」と「ウナギ」との関係を考える際に、「だ」の有無が解釈の決定権をもっているようには思われないからである¹²⁾。

また、山梨 (1988) は、ウナギ文を「広い意味での換喩ないしはメトニミーの一種とみなす」(p. 121) という見方をとっている。「問題の行為の必要条件の一部分だけを表現することにより、問題の依頼行為そのものを伝える」(p. 118) という特性が、ウナギ文に見られるという指摘である。メトニミーが近接性に基づく言葉のあやである点で、池上 (1981) との共通性を見

ることができる。ただ、山梨の場合、ウナギ文発話を「メトニミ的発話」だと位置づけているだけで、その解釈過程について具体的な説明はされていない。

それはさておき、デフォルトで得られる「同一関係」や「包摂関係」がキャンセルされたらとすると、推論のポイントは、それに代わる「関係 R 」をいかにして見つけ出すか、ということになる。しかも、その「関係 R 」を想定することによって、ウナギ文発話が、実際の発話状況の中で有効な文脈効果をもつことが条件である。

実は、この「関係 R 」を明示する上で、ウナギ文のパラフレーズに使用されていた「食べる」「注文する」という動詞が重要な役割を果たす。「ぼく」_iと、「ウナギ」_jまたは「<ウナギ>」との二項関係 R を示すということは、それぞれを項に代入することのできる、二項述語を導入するという他にないからである。「食べる」「注文する」は二項述語であり、「 X が Y を食べる」_i、「 X が Y を注文する」のように使用される。前述した通り、このとき、それぞれの項は、「 X は食べる主体」、「 Y は食べられる対象」のように意味役割を与えられる。これは、「 X と Y との間に、<食べる主体>対<食べられる対象>という相互関係がある」という二項関係を設定したことに他ならない。

以上の考え方をまとめると、次のようになる。

- (63) 「 A は B だ」形式の発話で、 A と B とが同一関係や包摂関係にあるというデフォルト解釈がキャンセルされる時、この発話が有効な文脈効果をもつためには、 A と B との間の二項関係 R について、一歩先に進めた文脈推論が必要であり、その推論成果は、二項述語 P によって明示することができる。

「ぼくはウナギだ。」の先行研究の多くに登場した、「食べる」「注文する」などの動詞は、推論成果を明示する（すなわち、解釈を記録する）という役割を担ったものだったのである。

6. 先行研究に見られる「過剰な文法化」と問題点

ところが、先行研究の中には、「 A は B だ」という発話形式の構造に注目しすぎる余り、ウナギ文の統語特性のみならず、発話解釈特性までを、もっぱら「は」の文法機能に求めたり（例えば、尾上 1981b）、もっぱら「だ」の文法機能に求めたり（例えば、奥津 1978）する主張が少なくない。言語運用に関わる語用論的特性が、語彙、統語、形態などの規約的な素性として言語形式に反映され、コード化されている（つまり、「文法化」されている）と見ているわけである。特にこの傾向は、「変形」による説明に著しく見られる。

「変形説」を初めとして、構造面だけからウナギ文を説明しようとした先行研究のまずさは、入力過程（すなわち、コード解読の段階）で、ウナギ文の語彙統語構造とその解釈を結びつけようとした点にある。しかし、ウナギ文発話の解釈は、実際には入力過程ではほとんど何も解決していない。さまざまな文脈情報を用いた認知的処理は、その次のステップ（中央思考過程）で行われると見られるからである¹³⁾。その点で、これらの先行研究に見られる文法化は、いささか「過剰な文法化¹⁴⁾」であると言わざるをえない。

ウナギ文の語彙統語構造の発展・拡張が必要となるのは、むしろ、文脈に応じて推論された解釈結果を、解釈者自身が出力表示する段階、すなわち、出力過程（心的解釈の明示化、再コード化の段階）においてである。出力過程を経て、再コード化された言語形式を、私は「解釈記

録形式」と呼び、高本(1995c)では、従来のウナギ文研究の対立点が、一定の文脈の中で語用論的に解釈された内容をどのような方式で再コード化して表示するかという、解釈記録形式の選択に関わる議論から構成されていたと主張した。本来、出力過程で行われている構造拡張を裏返しにして、それを入力過程の問題として処理するところから、構造縮小(省略、縮約、はしり、削除)という見方が出てくる。このような処理のしかたは、解釈の出口を、あたかも解釈の入口であるかのように扱う、一種のすり替え操作であるように思われてならない。あえて「過剰な文法化」と批判するゆえんである。

しかし、その一方で、ウナギ文発話の解釈を語用論の範疇で扱おうとする研究にも、問題がないわけではない。最後に、その点を指摘してまとめにしたいと思う。

私は、ある特定の文脈におけるウナギ文発話の効果について、次の三者は入念に区別されなくてはならないと考えている。しかし、ウナギ文の先行研究の中には、区別が十分でないものもある。

- (64) a. ウナギ文発話がうなぎ料理の注文を意図した発話だと理解されること
 b. ウナギ文発話によって実際に注文行為が遂行され、それが成功すること
 c. ウナギ文発話による注文行為が充足され、実際にうなぎ料理が運ばれてくること¹⁵⁾

ある話し手の「ぼくはウナギだ。」という発話が、うなぎ料理の注文行為として遂行され、それが成功するためには、発話場面が営業中の料理屋であり、しかも、話し手と聞き手が、客と店員というような社会的役割を分担している必要がある。例えば、杉浦(1991:86)では、‘performative’なウナギ文にこのような条件が課せられることを、Austin(1962)の適切性条件(felicity condition)の考え方を援用して指摘している。

また、岩下(1990)は、「ぼくはウナギだ」という発話について、「有限個の中から一つ選ぶという共通理解事項があって、受け手の方から見れば、この客の注文がこれだ、という情報が得られれば済んでしまう」(p.27)という指摘をしている¹⁶⁾。この選択範囲を「有限個の元からなる集合」に限定するのが、例えば、料理屋のメニューの働きである。メニューの中にウナギ料理の品目があるということ(つまり、その食堂でウナギ料理が提供可能なこと)は、明らかに、ウナギ文を用いた注文行為が成功し、また充足されるために必要な条件である。

しかし、「ぼくはウナギだ。」という発話が、ある発話場面において、うなぎ料理の注文として成功したり充足したりするために必要な諸々の条件は、実は、社会体制や文化環境の側に属する問題であって、言語理解そのものの問題ではない¹⁷⁾。ウナギ文発話で我々が言語学の立場から問題にすべきは、うなぎ料理の注文が成功したかどうか、あるいは、その注文が充足されたかどうかという点にあるのではない。一見、パラドックスを起すかもしれない文でありながら、場面場面で、有効な文脈効果をもつ発話として解釈されるのはなぜなのか。この間に答えるのが、言語学の一分野としての語用論の任務であろう。

しかし、こういう問題意識が必ずしも共有されていないところから、次のような議論が生まれてくる。

- (65) a. 「ぼくはウナギだ。」の「ぼくは」は必須ではない、むしろない方が料理の注文としては自然だ。
 b. 「ウナギね。」や「ウナギ。」だけでも、料理の注文として十分に通用する。

しかし、「ウナギだ。」「ウナギね。」「ウナギ。」という発話形式では、65)に示したようなパラドックスが生じる可能性もない。つまり、「ぼく」と「ウナギ」との関係が、一致関係や包摂関

係として(誤って)デフォルト解釈される可能性もないわけである。その点で、これらを、「ぼくはウナギだ。」と同列に論じることはできない。逆に、「ぼくがウナギだ。」「ぼく、ウナギね。」のように、「は」や「だ」という要素が顕現していない場合であっても、「ぼくはウナギだ。」と同様の解釈問題が当然生じることになる。

以上、パラドックスを生じるデフォルト解釈をキャンセルした上で、「ぼく」と「ウナギ」との関係を文脈推論するということに、ウナギ文発話の解釈特徴があるという私見を述べた。
(了)

注

- 1) 章・節の見出し番号、ならびに例文・引用の掲出を示す見出し番号は、前稿からの通し番号とした。ただし、注の番号は新たに振り直した。
- 2) 島田(1983)は、自説を「新たに『呼応文』説を提案するもの」(p.2)と位置づけている。ただし、この種の質問が文脈を作っている場合にウナギ文発話が使用されやすいということは、金田一(1955)をはじめ、ウナギ文の先行研究の多くで早くから指摘されている。
- 3) ここで島田は、「ボクハウナギ」という形式の回答が、すでに「見極めのつく範囲の意味内容」を構築していると見ているわけだが、これは、「述語部分『食ベル』『注文スル』などは、『ウナギ』という目的語を掲げることで、話し手聞き手の間にあっては、一瞬で理解される心理的融通性が存在する」(p.23)という見方を背景にしている。
- 4) 「解釈記録形式」については、前稿(高本1995b:130)に概略を、また、高本(1995c)に詳細を述べている。
- 5) 薬は、「Xは」の省略を「主題の隠形化」と呼び、これをウナギ文の「派生原因」であると同時に「派生に必要な文脈条件」としてしている(p.49)。「Aは」ではなくて、「Xは」の方が省略されるのは、「対比色のある『は』」が「情報の新旧、重要度」の点で優先し、「省略は対比色のない『は』」から行われる」ためだという(p.51)。
- 6) 薬(1988)に掲出されている例文に手を加えて、高本が作例した。
- 7) 杉浦は、自説を「述語消去説」と呼び、述語代用説や分裂文説よりも「適当」で、「多くの事実を説明できる」と主張している。
- 8) 'performative'は、Austin(1962)の用語で、一般に「遂行的」と訳される。その対局をなすのが、'constative'(事実確認的)である。杉浦は、ウナギ文の先行研究に触れて、「今までの分析が対象としていたのは、constativeなウナギ文だけであった」(p.90)としているが、必ずしもそうではあるまい。また、「だ」が「『断定』という意味を担っている」という見方を不用意に拡大して、「だ」の有無とconstative/performativeの区別を直結させている点は特に問題である。例えば、「お前は床そうじだ。」という発話は、命令という遂行的発話行為として使用することができる。
- 9) 高本(1995c)では、構造拡張のしかたの一般的なタイプ分類名称に従って、Aタイプに「NHR」、Bタイプに「NHL」、Cタイプに「NAR」、Dタイプに「XA」というタイプ呼称を当てた。
- 10) 例えば、奥津(1978:87)に次のような文がある。「『ダ』ではない『ダ』もあるけれども、『ダ』である『ダ』もあるのである。」一見、同語反復と矛盾律違反の例文にしか見えな

いこの文の「意味」を理解するためには、相当の文脈推論が必要である。

- 11) ここでは、主として名辞論理を念頭に置いている。名辞論理において、「AはBだ」が示す周延関係がどのように捉えられたかについては、鯨坂ら(1987)、海老澤(1988)を参照のこと。
- 12) 「だ」が必須の要素ではないことについては、堀川(1983)、島田(1983)、杉浦(1991)、全(1992)などが繰り返し主張している。また、ウナギ文において、「だ」という文法形式が果たす役割として、次のような点が指摘されている。(A) 統語的・形式的に完全な文としての構造的安定性をもたらす(久野1978:90)、(B) テンス・モダリティ要素を後続させることができる(Shibatani 1990:370)ほか、複文へ発展させることができるなどの構造的拡張性をもたらす、(C) 話し手の年齢・性別・社会的役割などのありかたを表現スタイルに反映させることができる(奥津1978:72)、(D) ていねいさ(politeness)などを含む伝達の心的態度のありかたを表現スタイルに反映させることができる(柴谷1989:393)。このうち、(A)・(B)は構造的側面での表現可能性に関わり、(C)・(D)は、スタイル的側面での表現可能性に関わっている。
- 13) 入力過程と中央思考過程の区別については、Sperber and Wilson(1986:第2章)参照。
- 14) ここで、「過剰な文法化(overgrammaticalization)」は、「語用論的説明の方がふさわしい言語行動の側面をも文法的に取り扱ってしまう」こと(Leech 1983:73)。すでに、高本(1995b:133)でも簡単に触れた。なお、Leech(1980:22-5)では、'overgrammaticization'という用語を用いている。
- 15) Searle and Vanderveken(1985)における「成功条件」(success condition)と「充足条件」(satisfaction condition)の区別に基づく。
- 16) この指摘のいわば原案は、岩下(1985)にすでに見られる。
- 17) これは、Blakemore(1992:93)の見解に基づいている。

参 考 文 献

(前稿(高本 1995b)で挙げたものは省略したが、書誌情報を改変したもののみ再掲した)

- 鯨坂真・有尾善繁・梅林誠爾(1987)『論理学—思考の法則と科学の方法』, 世界思想社。
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』, 大修館書店。
- 岩下裕一(1985)「意味の補助線—『国文法と意味・場面』続考」, 昭和学院短期大学紀要 21。
- 岩下裕一(1990)『「僕ハウナギダ」と『象ハ鼻ガ長イ』の統一場—表現法の思い出から』, 昭和学院国語国文 23。
- 海老澤善一(1988)『論理について』, 梓出版社。
- 菊地康人(1995)『「は」構文の概観』, 益岡隆志〔ほか編〕『日本語の主題と取り立て』, くろしお出版。
- 國廣哲彌(1980)「言語理論」(国語学界の展望), 国語学 121。
- 小泉 保(1990)『言外の言語学—日本語語用論』, 三省堂。
- 柴谷方良(1989)「日本語の語用論」, 北原保雄〔編〕『日本語の文法・文体 上』(講座日本語と日本語教育 4), 明治書院。

- 島田昌彦 (1983) 『『ウナギ文』論争の疑問』, 金沢大学文学部論集・文学科篇 3 [若干の改変を経つつ, 島田 (1988) 所収『『ウナギ文』を巡る諸論』, 島田 (1992) 所収『ボクハウナギダ文論争』として再掲].
- 島田昌彦 (1988) 『国語における文の構造』, 風間書房.
- 島田昌彦 (1992) 『新修 日本語の再生—新国学の模索』, 能登印刷出版部.
- 高本條治 (1994a) 『何が旅ごころを誘うのか—JR 広告コピーの語用論的分析』, 学苑 650.
- 高本條治 (1994b) 『『おはなが ながいのね』の解釈—まど・みちお『ぞうさん』の語用論的分析』, 『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』, 三省堂.
- 高本條治 (1995a) 『カワセミは飛んでいるのか?—川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析』, 上越教育大学研究紀要 14-2.
- 高本條治 (1995b) 『『ウナギ文』の語用論的分析(1)—文脈における語彙統語構造の発展と拡張』, 上越教育大学研究紀要 15-1.
- 高本條治 (1995c) 『いわゆる『ウナギ文』の表意解釈とその記録形式』, 国語学会平成7年度秋季大会要旨.
- 細川英雄 (1990) 『日本語を発見する』, 勁草書房.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』, 東京大学出版会.
- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Clarendon Press. [坂本百大 (訳) 『言語と行為』 (大修館書店, 1978年)]
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell. [武内道子 (ほか訳) 『ひとは発話をどう理解するか』 (ひつじ書房, 1994年)]
- Leech, G. 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics*. John Benjamins. [内田種臣 (ほか訳) 『意味論と語用論の現在』 (理想社, 1986年)]
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman. [池上嘉彦 (ほか訳) 『語用論』 (紀伊國屋書店, 1987年)]
- Searle, J. R. and D. Vanderveken. 1985. *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge University Press.
- Shibatani, M. (柴谷方良) 1990. *The Language of Japan*. Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. [内田聖二 (ほか訳) 『関連性理論—伝達と認知』 (研究社出版, 1993年)]

A Pragmatic Analysis of So-called *Unagi*-sentence (2) Contextual Development and Expansion of Lexico-syntactic Structure

Joji TAKAMOTO *

ABSTRACT

This is the second half of my serial argument concerning what is called '*unagi*-sentence' (i.e. a Japanese sentence type such as '*Boku wa unagi da.*'), continued from my preceding paper in the last issue.

In this paper, first, I resume reviewing several previous studies of *unagi*-sentence, and divide their ways of paraphrasing into four types. Secondly, I suggest that when the default assumption would be canceled (under a certain contextual condition), we should attempt some advanced inference so as to understand what is conveyed by the *unagi*-sentence, appropriately. Thirdly, I point out that some structural explanations formulated in the previous studies of *unagi*-sentence seem to have fallen into some state of 'overgrammaticalization.'

* Division of Language, Department of Japanese Language